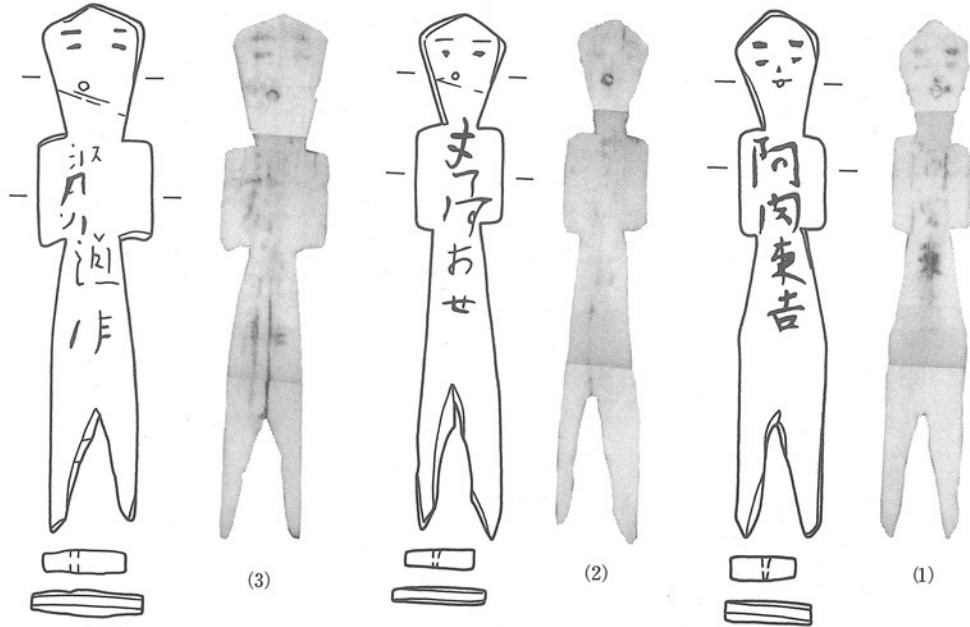


所在地	石川県金沢市磯部町	石川・磯部 <sup>いそべ</sup> カンダ遺跡（第一八号）	〔阿閉東吉〕
調査期間	一九九五年（平7）八月～一二月	〔丈マ阿古女〕	〔2〕
発掘機関	金沢市教育委員会	「□□道□」	〔3〕
調査担当者	楠 正勝		
遺跡の種類	集落跡・祭祀跡		
遺跡の年代	縄文晩期・古墳時代前期・平安時代・中世・近世		
木簡の釈文・内容			
磯部カンダ遺跡は、金沢市街地の北方約2kmに位置し、西方約○・五kmには浅野川が流れる。遺跡はこの河川の右岸に形成された自然堤防の外側に広がる後背湿地内の微高地に立地する。	磯部カンダ遺跡は、金沢市街地の北方約2kmに位置し、西方約○・五kmには浅野川が流れる。遺跡はこの河川の右岸に形成された自然堤防の外側に広がる後背湿地内の微高地に立地する。	(1) (2) (3) はともに正面全身人形の表面に墨書するものである。頭部は圭頭状、顔は頭部から斜めに切り落とされ、肩部は怒り肩、手の切り込みはなく、股間は三角形に切り取られている。さらに、口の辺りには木釘が打ち込まれ、いずれも根本で切り落とされている。三点とも同形で同じ作りをしていることから、同一の作者の手によるものと考えられる。石川県内では例の少ない形態（金沢市上荒屋遺跡で出土例あり）をもつ人形である。	〔1〕 「阿閉東吉」 〔2〕 「丈マ阿古女」 〔3〕 「□□道□」
木簡三點は、先に本誌（第一八号）に報告した木簡	内容は三点とも人名を記し、祈禱者名と考えられる。(1)「阿閉」の氏族名は石川県内では初例であり、(2)「丈マ」の氏族名は上荒屋遺跡と河北郡津幡町加茂遺跡（本誌第一三号・一八号）に例がある。	90×16×5 061 93×16×4 061 97×21×5 061	
今回報告する木簡三點は、先に本誌（第一八号）に報告した木簡と同様自然流路（幅約9m深さ2m）から出土したものである。同流路からは多量の木製祭祀具（人形二〇点、斎串五二点、舟形二点、鳥形一点、馬形一点）が出土しており、ここで大規模な祭祀行為が執り行なわれていたものと考えられる。これらの木簡は自然流路の肩部付近の同じ地点から出土したことから、ほぼ同時期（平安時代初期・九世紀）に使われた可能性がある。	なお釈説には、国立歴史民俗博物館平川南氏、金沢市埋蔵文化財センター小西昌志氏からご教示を得た。また保存処理後の知見をふまえ、先に刊行した報告書での釈文を一部追加・訂正している。		
関係文献			

金沢市埋蔵文化財センター「磯部カンダ遺跡」（一九九九年）

（楠 正勝）



(写真は赤外線画像)

埋蔵文化財写真技術研究会編集・発行  
『埋文写真研究』第一一一号

文化財写真の技術・情報などに関する記事を載せ、文化財調査に携わる人必携のマニュアル書である『埋文写真研究』の最新号が刊行された。

内容は杉本和樹「木簡の撮影」、牛嶋茂「俯瞰撮影」、山口格「モノクロフィルムの感色性テスト」、加藤春生「カーメラム」ブメントの基礎知識(3)、勝田徹「希釈現像について」など

B五版 一五六頁 カラー図版多数 二〇〇〇年七月刊

送料 四冊まで五〇〇円、五~一〇冊まで一、〇〇〇円  
一冊以上は無料  
領価 三五〇〇円

三号以前は品切れ  
四~八号 三、五〇〇円 九~一〇号 三、〇〇〇円  
連絡先

埋蔵文化財写真技術研究会 中村一郎

〒六三〇一八五七七 奈良市二条町二丁目九一

奈良国立文化財研究所内

郵便振替 ○一〇五〇一九一九九三〇  
電話 ○七四二一三四一三九三一

埋蔵文化財写真技術研究会